

社会の隅々までキリスト教諸派の組織に分断された特有の近代化過程の結果、現代アフリカには国民文化の土台となる「高文化対民俗文化」の対比構造が存在しない。この状況の克服と国民文化建設に本来保守的な諺が貢献し得る、逆説的な可能性を検討しよう。

### 1. 現代社会と矛盾する諺の伝統的な知恵

諺の定義では、(1)簡明で技芸的な固定的形態、(2)情緒的で保守的な社会的効用、(3)正当な権威性、等が強調される。だが、諺の形式と内容・働きも社会ごとに多様だから、言語活動の独自の布置全体の中で考察すべきで、包括的な定義は無い。ただ、誰も諺だと感じる何かがある。出所が何であれ、或る権威へ迂回して意図を間接的に表現することで話者に権威と免責をもたらし、眼前の事態の統御を図る「引用」という言語形態がそれだ。

ただし、諺が権威的、保守的、固定的な言語表現である以上、個人の自由を最大の価値とし、その阻害要因の排除を発展と見る現代社会の根幹的規準と背反する。すると、諺をもって現代社会の重要問題の解決に資そうとは、そもそも時代錯誤と言えるかも知れない。

諺の反近代性は、女性に関する例で容易に確認できる。アフリカ全土の諺が母親を讃えるが、他の範疇の女性は邪悪で、その奸智に屈するなどと警告する。ベニンのフォン人の諺「女は諸悪の根源」が、諺は男性（権威）が作り、男性が男性のために語る事実を端的に明かす。こうした諺を媒介に性の非対称性の変革を試みるなど、何人にもできない。

### 2. 諺は現代でも民俗文化の基底たり得るか

諺は他の文化事象から孤立せず、複雑な脈絡に埋め込まれる。ならば、諺が文化の或る側面では肯定的に作用する場合もあろう。国民文化の前提となる「高文化対民俗文化」の対比構造を欠くアフリカ社会の現代的文脈でも、諺のその可能性を活かせると思う。

ところで、ケニアの国民的同一性をスワヒリ語が支えていることを窺わせる歴史的事実がある。ケニヤッタ大統領の死に続く政情不穏な頃（1978）や、隣国ウガンダの大統領アミンが攻勢に出た時（1975）、政治集会ではスワヒリ語だけが使われた。政治家は、国家が危機に瀕すると民衆の心に届くスワヒリ語を、平時は高文化の言葉、英語を重用するのだ。このスワヒリ語に当たる役割を村々で諺が今担えないか。これが本報告の眼目である。

民俗文化の平準化が国民文化の形成に繋がるのだが、アフリカの農村の特徴は日本の村祭や正月・盆に当たる行事がなく、共同体として住民を一体化する民俗文化自体が存在しないことだ。それは、高文化を招来した植民地主義の性格と浸透過程に由来する。国家と

一体化したカソリックが幾世紀も独占的に統治した中南米やフィリピンでは、普遍的・国家的・都市的な支配文化（「大伝統」）と農村共同体の民衆的文化である民俗文化（「小伝統」）の対照性が、文化的特徴をなす。だが、19世紀末のアフリカ植民地化では政教分離が原則で、その結果各地に多種多様なミッションが一气に入り、欧州以上の宗教的多元状況が生まれた。それが、村共同体を宗教的・文化的にモザイク化し、分断した。

今日、村の統合は村の寄合で図られる。私の調査地では、事態の膠着を打破する鋭く革新的な言葉を担う役割とそれを伝統的な価値へと繋ぎ留める役割とを新来の者と草分けの者とで分有する政治構造が、変化しつつ保たれた。前者は「謎々者」と呼ばれ、後者が前者を諺や呪詛で牽制した。今も、前者による革新的な解決は、後者が最後に持ち出す諺で中和され、承認される。だが、後者は、諺の意味を新文脈で大胆に読み替えつつ前者の革新を包摂する点で、別の革新性を含む。ここに現代化への諺の貢献の芽が潜もう。

諺には、元来民族的差異を超えた共通性がある。さらに、上で見た、変化を柔らかく受容する諺の免責性の現代的様相を全ての民族集団で同時並行的に促進できれば、民衆文化を共同体と国家社会に向けて収斂させて平準化する、現代的な可能性が生まれよう。